光の女神と眠り姫　～碧い月の神話～

蓮花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
光の女神と眠り姫　～碧い月の神話～

【Ｎコード】
Ｎ２６６４Ｋ

【作者名】
蓮花

【あらすじ】
珍しく（？）女の子が主人公です。まあ、おおざっぱに言っちゃうと、不思議な世界に飛ばされて、悪い奴をやっつける話です。（え？おおざっぱすぎますか？）もっと詳しく話すと……と、言いたいですが、ネタバレ的なこと言っちゃいそうなんで、やめとく事にしましょう。ごめんなさいｍ（＿＿）ｍ興味をもたれた方は、ぜひぜひご覧ください。マイペースな更新ですが、よろしくお願いします♪♪♪

1番　すべての幕開け

ふと眼を開けたら、私は暗い洞窟の中にいた。

（……え、やだ、また？またこの夢？）

洞窟を照らす唯一の光は、胸に下がる赤色のペンダントだけ。しかしそれも、足元を照らすのもままならない、かよわい輝きしか放っていなかった。

「早く、早く走って！」

私の横から、女の子の声がした。しかし、姿はぼんやりとした影のようだ。声は洞窟との壁に反射して、当たりいっぱいに響き渡った。

それと同時に、後ろからおぞましい笑い声が聞こえた。

「ははは……いつまでにげる？無駄だということが分からないのか」

その声も女の子の声のように響いたが、おぞましいそれはぐオオ……と、まるで魔物の雄たけびのようにに響いた。ひょっとしたら、ほんとに魔物の雄たけびだったのかもしれない。

生ぬるい風が、私たちを吸いこもうとしていた。足が少しずつ、引っ張られていく。

（に、逃げなきゃ……。え、足が……動かない？）

いきなり体が重くなり、思うように足が動かない。焦って動かせば、余計に重くなってきた気もしてくる。

「あ～もう！遅いなあ。毎回のことで、なれちゃったけどね」

いつのまにか、女の子とは反対側に、影っぽい男の子がいた。

足　すくんでるの？そういうと、男の子は笑った。もとい、笑ったような声がした。姿がよく見えないし、ほんとに笑ったのかは分からない。

「しゃーない。俺が助けてやろう！」

そういうと、男の子が何か言葉をつぶやいた。しかしその言葉はなぜか耳に入らずに、すぅっと頭から抜けて行った。……なんか、外国語？いや、違う。あれ？なんでだろう？どこかで聞いたことがあるような……。

「どう？軽くなった？」

男の子からそう言われて、始めて自分の足からあの変な違和感が消えたのを感じた。

ぐオオーという音が、次第に遠ざかっていく。それと同時に、ヒューという風の音がし始めた。

「ちょっと、走るなら言いなさいよ！おいて行かれちゃったじゃない！」

後ろから、さっきの女の子の声がする。

（あれ！？私、走ってるの！）

「今気づいた？走ってるってこと」

男の子が、ニコッと笑って言った……ように感じた。

「もうすぐ『門』に着くはずよ！」

後ろから声が聞こえ、そしていきなり風がやんだ。もう、魔物の雄たけびは聞こえない。どうやら、相当遠くまで来たようだ。

目の前には、見上げないといけないくらい大きな扉があった。女の子も追いつき、三人並んでそれを見上げる。

（いつもはここで、目が覚めるんだけど……？）

目が、覚めなかった。

「ついに、この扉を開く日が来たか」

いつもとは違う、新しい夢の中身だった。

「長かったわ。ついに、ここが半年もかかった、長い長い旅の終着点なのね」

大きな大きな、扉。こう、まじまじと見るのは初めてのような気がする。いつもしっかり見る前に、起きてしまうから。

ぎいい……と音を立てて扉が開く。光が扉からあふれ出す。すると、男の子と女の子の姿が浮かび上がった。一瞬だったのでよくわからなかったが、男の子はすごく身長が高く、赤毛混じりの茶髪だった。女の子は、私と同じくらいの身長だったけど、銀髪の長い髪だった。

風が強く吹く。女の子の髪が、風でひるがえった。光もどんどん増していく。まぶしくって、思わず私は目をギュッとつむり、腕で

目を覆った。とじた瞳の中まで、光がさすように入ってくる――――。

1番　すべての幕開け（後書き）

1番見ていただき、ありがとうございます。のろのろ更新ですが、2番も見ていただけたらうれしいです（＊^__^＊）

2番　始まりの気配

「彩香！いい加減に起きなさい！学校遅れるよ～」

朝？え……さっきまで、扉の前に……って、

「またあの夢！？」

飛び起きた彩香は、足元にあった時計をけってしまった。時計が宙を舞い、床に落ちる。

「っつ、痛ったあ……」

「何やってるの。バカだね。おねーちゃん」

彩香の妹の結菜（ゆな）が「はぁ」と大きなため息をついた。

歯を磨きながら、彩香の部屋の前を通過していく。

「まったく、私のねーちゃんは。ほんとにおバカなんだから……」

そんな小言が聞こえる。

「仕方ないでしょっ！私は、あんたと違っておっちょこちょいなの！」

そう言って、彩香はベッドを下りた。何気なく、地面に落ちた時計を見ると……

ＡＭ７：２０

……ＡＭ７：２０！？

「って、もう学校いかんなんやないかい！」

そういえば、結菜は制服を着ていた……

「お母さん！なんで起こしてくれなかったの～！」

そういうと彩香は、階段をダダダっと下りた。とりあえず、近くにあった制服を着て、焼いてあったトーストを口につっこむ。

「だって、いつもどうり、ゆすったり、布団はがしたり、叫んだり、いろいろしたけど」

「おねーちゃん起きなかったよ」

「っもう！普通に起こしても、起きないの！あの変な夢は、何をやっても起きれないんだから」

彩香はパクパクと、トーストを食べる。焦っているのになかなか食べれない。そんな事をしている間に、結菜は学校に行ってしまった。

「行ってきます」

「待って！いかないでよ」

そんな声もむなしく、玄関のドアはカチャンと音を立てて閉まってしまった。そのあと、１０分遅れて彩香も家を出る。

「行ってきますっ！」

彩香はそう叫ぶと、家を飛び出した。外に出た彩香の目の前に、真

っ白い雪景色が広がる。太陽の光が雪に反射して、目を開けるのが辛い。

「わぁ、初雪だ」

ほぅ、と息をはくと、白い息が出た。近所の子供たちが、雪だるまを作っている。地面にはたくさんの足跡がついていて、今までに多くの人が通ったということがわかる。

「あ、早く学校行かないと」

彩香は、雪道をサクサクと走り始めた。

その頃、彩香が通う凉星中学校では、朝ホームが始まろうとしていた。窓際の席に座っている健斗は、いつまでたっても彩香が来ないことを気にかけていた。

（川上、遅いな。遅れてくるなんて、あいつらしくない……）

「健斗、おはよう！」

声をかけられふと顔をあげると、そこには幼馴染みの勇馬のキラキラ笑顔があった。

「あぁ、勇馬か…」

そんな言い方をされた勇馬は、顔をぶぅっと不機嫌そうに膨ら

ませた。

「『勇馬か…』じゃないよ！おはようって言ってるんだから、おはようって返してよ…」

「あ、ごめん。おはよう」

健斗が謝ると、勇馬はさっきとは正反対のニコニコ笑顔をうかべて、健斗の前の席に座った。

健斗と勇馬は、クラスでとても人気だ。健斗はクールでかっこいいし、勇馬はかわいくて母性本能をくすぐられる。二人とも成績はある程度出来て、スポーツも出来る。そんな二人が窓際で風に吹かれているのだから、女子の視線は窓際に釘付けだったのだか、そんなことも気にせず二人はしゃべっていた。

「ねぇ、なに考えてるの？」「いや、何も考えてねぇよ」「嘘だ、健斗上の空だったもん」

あっわかった、と勇馬が言うと、健斗の耳もとでささやいた。

「彩香のこと考えてたんだ」「違う」

「あ、図星だ」

勇馬が笑った。健斗は、かぁっと顔が赤くなった。

「ほらほら、赤くなった」

「違うって、なんかここ暑いから」

「あれれ？おかしいな、今は冬だよ」

「暖房があたりすぎてるから暑いんだよっ！」

まるでりんごのようになってしまった健斗をみて、勇馬が「あ～面白い」と呟いた。

「お前なぁ…」
「おーい、朝ホーム始めるぞ」
上野先生が入ってきた。勇馬はくるりと前を向いてしまい、健斗は続きが言えなくなってしまった。
結局、彩香はまだ来ていなかった。

2番　始まりの気配（後書き）

どひゃー。文章がおかしい&投稿が遅れた！すいません。ただ、四月というのは忙しい季節ですなぁ……。次の話は結構出来上がってるんで、早めにできるんだと思うんですけど…？とにかく、頑張りますっ！

3番　いつもと違う朝

そのころ彩香は、学校まであと少しのところを走っていた。彩香の担任の上野先生はかなり遅刻に厳しいので、なんとしても遅れたくなかった。

雪の上を走るたびに、サクサクと音がする。その音が、不自然に辺りに響く。……なんだか怪しい雰囲気。

でも、急いでいた彩香はそのことに全く気づいていなかった。

「や、やばい～…あ！」

涼星中学校の始まりを告げる鐘が、辺りに響き渡った。

「あーぁ、遅刻しちゃった……」

遅れまいと今まで走っていたのに、遅刻してしまった。いきなり走る気力が無くなって、彩香はぽてぽてと歩き始めた。

彩香は、普段学校に遅れてくるタイプではない。それどころか部活をしていた頃は、朝は一番早く来ることも珍しく無く、人一倍早く朝練を始めていた。

しかし部活が終わり、受験勉強をしなくてはいけなくなると、寝る時間が遅くなり、しかもあの変な夢も見るようになったので、朝早く起きれなくなってしまったのだった。

それでも彩香は、鐘と同時に、などギリギリな事はあったが学校に遅れることは今までで一度も無かったのだ。

それが、今日は遅れてしまった。絶対あの変な夢のせい。いつもより今日は少し夢が長くて、そのせいで起きるのが遅れてしまった。

「先生、遅刻した人に厳しいんだよな……」

上野先生は、遅刻した生徒を、なんとベランダに立たせることで有名だった。たとえ灼熱の太陽が照りつける日でも、今日のように雪が積もる日も。正直意味がわからない。けど先生に言われたんだから、やるしかない。

「はぁ、遅刻か……」

重い足を引きずりながら、彩香は中学校へと向かった。

このとき、彩香は気がつかなかった。鉛色の空に、黒い人影が浮かんでいたことを。その影は彩香を見つけると、にやっと口元に笑みをうかべた――。

やっと彩香は学校についた。案の定、朝ホームはもう始まっていた。廊下はしんと静まり返っている。

ガラガラ……

彩香は、ゆっくりと教室のドアを開けた。

どうか、先生に気づかれてませんように……と願い、そろりそろりと屈みながら教室の後ろを歩く。たぶん今から席につけば、先生には遅刻したことはバレないはず……

「川上彩香！もうとっくに始まっているぞ！早く席に着かんかい！」

「は、はいっ！！」

どうやら、彩香が遅刻したことは、もうとっくにバレてしまっていたらしい。回りからクスクスと笑い声が聞こえる。はぁ、と大きなため息をついて、彩香は席についた。

「ねぇ健斗。みんな、あたしが遅刻してきたこと気づいてた？」

前の席にいる健斗に、ひそひそと話す。

「うん、とっくに」

健斗は外を見たまま答えた。はたから見たら、おもいっきり健斗が彩香に冷たく接してるみたいだが、健斗と幼なじみの彩香は、健斗がそういうやつなんだということを小さい頃から知っているので気にもとめなかった。

「川上、ベランダに立っていなさい」

「えぇっ！！」

「えぇっ！！じゃない！初めて遅刻したからといって、甘くはないぞ。受験前の大切なときに、遅刻するなんてたるんぞるぞ！」

「だからといって、ベランダじゃなくてもいいじゃないですか……」

彩香は率直に、今まで立たされてきた人たちが思ってきた質問を投げかけた。

「そのほうがより反省するからだ」

思っていたとおりの答えが帰ってきた。

「や、そうですけど…」
「ほら、つべこべ言わずにベランダに行きなさい」
「……はーい」

これ以上話してもダメだと思った彩香は、仕方なくベランダへと足をはこばせた。ベランダにでる大きな窓を開けると、ひんやりとした空気が外から入ってきた。

窓をくぐり抜けると、真っ白い世界が広がっていた。雪がチラチラと天から降ってくる。辺りは雪が積もったせいか、しんと静まりかえっていた。

彩香は、意識してクラスの人から見えない位置に立った。やっぱり遅刻したんだから、多少恥ずかしいし……。

4番　運命が始まる

「さて、今日の連絡は…」

彩香が出ていき、先生は朝ホームの続きをやり始めた。いつも通りの1日が始まる。退屈な1日、毎日が同じことの繰り返し。少なくとも健斗はそう感じていた。何か面白い事があるわけでもない、何かハラハラする事が起きるわけでもないこの世界に、いい加減飽き飽きしてきた。早くこの世界での使命を全うしたい。そのために、姫を探さないと……

「おーい川畑。話を聞いているか？」

窓をずっと眺めていたせいか、先生がそう言った。

「……なに？聞いてるけど」

健斗は少しイラッとして、いつもより少しトゲのある言い方をしてしまった。

「なんだ、その言い方は。もうすぐ受験なんだから、もっとしっかりとした言い方を身に付けないといけないぞ。もし面接でその喋りが出たらどうするんだ」

はぁ、めんどくさい。俺はこの世界の人間じゃないんだから、受験だの面接だの関係ない。それよりも先に、やらないといけないことがあるのに……

「……不満げな顔だな。自分には受験だの面接だの関係ない、とか

なんとか思ってそうな感じだな」

心の内を言い当てられても健斗は動揺せず、キッと上野先生を睨んだ。

「だから？俺には受験勉強より、面接練習より、やらなくてはいけない事があるんだ」

健斗と先生を交互に見ていた勇馬は、２人の間でバチバチと火花がちっているような錯覚がした。それくらい激しく睨みあったあと、先生がはぁっとため息をついた。

「とにかく、こんなことを言っていたらきりがない。川畑は、受験のためにもその言い方を直すんだな。あと１ヶ月で受験だ。イライラするのもわかるが、もっとしっかりとするように」

健斗は頷きもせず、窓の外をまた眺め始めた。

「まぁ、落ち着いて」

勇馬がそっと後ろを向いて、こっそりとそう言った。健斗はその言葉に頷いたものの、窓を見つめたままだった。

（……何で姫は姿を見せてくれないんだろう）

健斗は窓の外を眺めながら、はぁ…とため息をついた。

（タイムリミットが迫っている……もう少し情報があればいいのに）

ふと、健斗は空をみた。この季節特有の曇り空。見ているだけ

で気分が下がるし、夏の澄みわたる青い空を恋しく感じてしまう。その空から落ちてくる白い雪、これが降っている間に、姫を探さないと…時間がない。

「健斗？どうしたの」

健斗が視線を声がした方に向けると、勇馬が心配そうな顔をしてこちらを向いていた。

「いや、なんにも」
「僕に怒ってる？」
「全然。てか何で俺が勇馬にイラつかないといけない？」
「いや、朝に彩香のことでからかったから、それで機嫌悪くなったのかな？って思って。よかったぁ、僕のせいじゃなくて」

勇馬はホッとした顔をして、それからニコニコっと笑った。

「俺は、自分の都合でイライラしてるだけだよ。ただ、八つ当たりするなんて俺らしくないな…」

相当参ってるのかな？そう言うと健斗はふっと笑った。

「おーい。いつまで喋ってるんだ」

先生がそう言った。勇馬はほっぺたをぷっと膨らませて目で笑うと、くるりと前を向いた。

また窓を見始めた健斗はおかしなものに気づいた。空に……何か黒いものが浮いている。どことなく人影のようにも見える。なんだか目があったような気がして、ぞぞっと健斗の背中に悪寒が走った。

（何なんだ？あれは……）

すぅっと近づいてくる。明らかに人だとわかるようなところまできて、そいつは止まった。

「勇馬、人が空に浮いているように見えたりなんかしないよな？」

そう勇馬に、恐る恐る言ってみる。勇馬は怪訝そうな顔をして、外を見た。

「人？……見えないけど、健斗の見間違いじゃないかなぁ？」

「だ、だよな。ごめん、変なこと聞いて」

（勇馬には見えてない？）

健斗の眼には、明らかに黒い人、たぶん男が写っていた。そいつはベランダを見ているようにみえる。ベランダには…彩香がいる。

健斗は本能的に、そいつは彩香を狙っているのだと悟った。

（なんだかよくわかんないが、彩香が危ないってことか……）

そいつは、空に浮いている。どう考えても人間じゃないだろう。とすると……

（俺と…おなじ人種なのか？だとしたら俺もヤバイかもな）

健斗は、体がこわばった。

（もし、あいつが俺に気づいたら……いや、それはないはず。俺は

まだ覚醒していないから）

そいつは手を複雑に絡め、ぶつぶつ呟くように口を動かした。すると、眼には見えない波のようなものを感じた。きっと、それは健斗にしか感じ取れてないだろう。それは同心円上に空間に広がっていった。

（うわっ！？なんだこの感じは？）

広がっていった波に触れた瞬間、空気が凍りつくような冷たい感覚が頭から背中を通って身体中に広がった。視界が真っ青に染まる。そしてその感覚は、いきなりふっと消えた。

（何だったんだ……今の感覚は）

「勇馬、今寒気がしなかったか？」

勇馬は……応えない。

「勇馬？勇馬っ！？」

後ろから健斗は強く揺さぶった。……揺さぶろうとした。しかし、勇馬の体はその場に凍りついたように動かなかった。

（固まってる……あいつの術か！！）

勇馬だけじゃない。他のやつも、先生も、みんな動かなくなってしまっていた。時が止まったような静寂が、辺りを包む。外を見ると、鳥が宙に浮いていた。まるで飛んでいる途中で空中に縫い付けられたような…。どうやら学校の外まで、術が効いているらしい。

健斗は廊下に出ようとした。教室のドアを開けようと、ドアに手をかけた。その瞬間…

「うわわぁぁっ！！！？」

電撃のような衝撃が、健斗の体を走った。それと同時に、ドアの反対側の壁までぶっとばされる。どうやら、この部屋から出られないようになっているらしい。

「っ、何なんだよ……これ」

身体中がずきずき痛む。健斗は、ゆっくりと立ち上がり空を見た。その瞬間、あいつと健斗の視線が交差する。

あいつは、怪訝そうな顔をしていた。もう一度手を絡ませ、波をこちらに発射した。

「ぐ……っ」

さっきとは比べ物にならないほどの力が、健斗に襲いかかる。体が押し潰されそうな感覚。しかしその感覚もしばらくしたらおさまった。体が、ふっと軽くなる。

…なんなんだ、お前は…

頭の中に、不思議な声が響いた。

（なんだ！？）

…なんだ、ではない。お前は何者だ…名乗れ…

健斗はそこで初めて、今の声が空に浮いているやつの声なんだと知った。

（どこから声がするんだ？）

…俺はお前の心に直接話しかけている…魔術の力でな…

（魔術！？）

…驚いてるな…さて…そろそろ質問に答えてくれ…お前は何者だ…光の姫の波動をこの世界に感じたとき…まだ覚醒していない火の力を感じた…それがお前か？…

（何を言ってるんだ？光の姫…それって俺が探してる姫のことか？覚醒していない火の力って…まさか俺？？）

…お前も姫を探しているのか…多分俺が探してる姫と…お前が探してる姫は…同じ人物だ…

（そうなのか！？）

…驚いているな…どうやらお前が火のツェトの末裔みたいだな…しかし力は目覚めていない…好都合だ…今のうちに光の姫…お前の姫を潰しておくか…

（なんだって！？）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2664k/

光の女神と眠り姫　～碧い月の神話～

2010年11月6日01時05分発行